



べふっ子の共育

～学校だより・つなぐ10月号 巻頭言として～

令和6年10月1日(火)

発行: 摂津市立別府小学校
校長 田中健一郎

「18歳意識調査」を知っていますか？私はそれらのデータを目にしたことはあったものの出典までは知らなかったのですが、日本財団が2018年から実施している18歳前後の人を対象にしたインターネットアンケートのことで、この夏に参加したいいくつかの研修会にてデータとして提示されていたので、自分でもHPを検索して詳しく見てみました。 日本財団HP→



自身と社会の関わりについて 1/2

自身と社会の関わりについて、以下の全ての項目で日本は6か国中最下位となった。特に「自分は大人だと思う」「自分の行動で、国や社会を変えられると思う」がそれぞれ3割に満たず、他の国に差をつけて低い。

Q 以下の項目に同意しますか。(各国n=1000)

※「はい」回答率を掲載

(単位: %)	自分は大人だと思 う	自分は責任があ る社会の一員だと思 う	自分の行動で、 国や社会を 変えられると思 う	国や社会に役立 つことをしたいと思 う	慈善活動のため に寄付をしたい	ボランティア活動 に参加したい
日本	27.3 6位	48.4 6位	26.9 6位	61.7 6位	36.2 6位	49.7 6位
アメリカ	85.7	77.1	58.5	73.0	66.7	70.4
イギリス	85.9 1位	79.9	50.6	71.2	69.5	64.2
中国	71.0	77.1	70.9	82.1	78.9	85.3 1位
韓国	46.7	65.7	61.5	75.2	62.4	70.7
インド	83.7	82.8 1位	78.9 1位	92.6 1位	83.7 1位	78.1

HPには様々なテーマに対するデータがありますが、特に「第46回 国や社会に対する意識(6か国調査)」の結果を見て、今の日本の現実を知った気がしました。対比された国として、アメリカ、イギリス、中国、韓国、インドとあるのですが、様々な社会的事象に対して、日本の18歳は総じて否定的で悲観的な回答をしています。

例えば、【自身と社会の関わりについて】の項の「自分は大人だと思う」の肯定的回答率は27.3%で6か国中最下位。「自分は責任がある社会の一員だと思う」も最下位の48.4%。自分の行動で国や社会を変えられると思うも最下位で26.9%。次の日本社会を担う人たちの意識がこのような結果であることにも将来の不安を感じますし、逆に他の国の若者の意識がとても高いということを知って、生まれてから18年間という年月でこれだけの意識の差が生まれる原因や理由はいったい何だろうか？そこにはそれぞれの国や社会が持つ子育てや教育に対する姿勢も大きく関係あるのだろうな、と考えさせられました。

昔の自分を思い返しました。自分のことを大人と思えたのはいつの頃からだろうか？自分の行動で何かを変えられたという経験をしたのはいつだっただろうか？

18歳の自分を振り返った時、自分以外のことや社会に目を向けられていたかと言えばそうではなかった。関心事と言えば、自分のこと、高校卒業や大学進学などの将来の自分の進路がどうなるのかといった目の前に横たわる漠然とした不安にとらわれていたようにも思います。恥ずかしながら自分が一人の大人と自覚して社会に参画している実感など全く持っていなかったとも振り返ります。

なぜ自分のことを大人と自覚できなかったのか？なぜ大人として自覚できるようになったのか？

逆接的ですが、私が自分を大人と感ぜられるようになったのは働き出して社会に触れたからでしょうか。自分の行為・行動が他者にも影響を及ぼすことを実感したこと。求められる課題解決に自分が向き合えないといけなと感ぜられたこと。要するに、もう自分はいつまでも子どもだと言てられない、自分がやらないといけなと突きつけられ感ぜられたからだと思います。自分の頭であれこれ悩んで考て、選択したり決断したりする経験を積み重ねることで、自分でもできる、自分がやってよいのだと言った有用感を感ぜられたこと、それが大人になるということなのかもしれません。

ある本には、今子どもたちに求められる力とは「社会をよく理解することと、その社会で自分の得た知識や技術をうまく活用する力」と書かれていました。なるほど、私が社会人として働き出して実感したのはまさにこのことかと思ひます。

そう考えれば、社会を知ること、社会を理解することを子どもたちに若いうちからどんどんさせることが、結果自分のことを大人と自覚させることにつながるのだと思ひます。我々日本の大人は子どもを「子ども扱い」し過ぎているのかもしれない。まだできないだろう、まだ早い、などを常套句にして大人になるチャンスを奪っているのかもしれない。必要なことは、失敗してもいいからどんどんチャレンジできる環境を子どもたちに整えてあげることなのだろうと思ひます。

この7月に1～6年生のべふっ子に聞いたアンケートの中の「得意なことや不得意なことにもチャレンジすることができますか？」という項目では、(あてはまる・だいたいあてはまる)の肯定的回答が75.7%でした。だいたい全体の4分の3の子どもたちはチャレンジできていると自覚している。しかし、チャレンジできていないと思てしまっている子どもたちが4分の1もいるということです。6歳～12歳という、人生で考えたらまだまだほんのスタートしてすぐの段階の、そんな若い時分にそう思てしまっている。いや、そう周りの大人や学校、社会が思わせてしまっているのかもしれない。とても残念なことです。子どもなんだから失敗して当たり前、チャレンジすることが大切なんだよ、というメッセージをもっとも意識して、何なら我々べふっ子サポーターの大人たちが同じように発信してあげることができれば、この別府小学校から将来を担う子どもたちの意識を変えることができるかもしれません。

まだまだ日本は依然として学歴社会です。大学受験、そしてそのための高校受験に重きが置かれる社会構造は私の小さいころからあまり変わっていません。社会もどのような学歴かで人を評価する、そんな風潮が変わらないから、結局子どもたちは少しでも偏差値の高い学校に入るためにも、間違わずに問題に答える、高得点を取ることが大切だと思てしまう。小さいころから間違ふことができないのです。正解を答えることが正しいと思わされてしまっている。そりゃあ息苦しいですよ。思い切ってチャレンジする気持ちもなかなか持てなくなるのだと思ひます。

実はわが子は現在18歳、高3生。クラブも引退して、今は毎日大学受験にむけて取り組んでいます。自分の部屋ではなく食卓テーブルで、私の向かいでいつもノートを広げて勉強しています。問題を覗き込んでも何を勉強しているのか、難し過ぎて私にはもう全くわかりません。何のアドバイスもできない。ですから私にできることは見守ることだけです。今の彼には「間違ふてもいいやん。失敗してもいいやん。」とはとても言えませんが。ここまで書いてきたことと矛盾する自分の気持ちに何とも言えないもどかしさを感じます。

私はわが子はもちろん、べふっ子の子どもたち、全ての日本の子どもたちには、自分で自分のことを大人と思える、自分はれっきとした社会の一員であると思える人になってほしい。この世の中の難しいことも厳しいことも、周りの人たちと力を合わせて自分から変えていくことができる、そんな人になってほしいと思ひます。そのためにも、我々18歳を経験して大人になった者が、ほんの少しでも良いから、1ミリの変化でも良いから、自分の役割の中で昨日までとは違ったアクションを起こしていくことにチャレンジしたい。そう思ひます。

かつて戦国時代、武士の子は12、3歳頃には元服して「大人」としての覚悟や振る舞いが

求められたとのこと。きっと周りの大人たちが育てる意識を持って子どもと接していたのでしょね。

